長野市立

博物館だより

第36号

特別公開

********重要文化財********

銅造菩薩半跏像

北安曇郡松川村 観松院所蔵

7月14日(日)～8月11日(日)

★常設展示室 2階

★「慈悲のまなざし」コーナー

〈写真提供 長野県立歴史館〉

日本はアジアの東端に位置し、大陸との交流を通じてさまざまな文化を取り入れてきました。アジアに端を発した仏教ー仏教彫刻は、アジア諸地域の交流を通して培われ、日本にもたらされました。この菩薩像は県内最古の小金銅仏とされ、飛鳥時代・7世紀前半の渡来仏とされています。

本像と同様の表現を示す銅像が、長崎県対馬の浄林寺の菩薩半跏像（上半身欠失）、新潟県妙高村の関山神社の菩薩立像で確認されており、朝鮮三国からの仏像伝達に、対馬を門戸として日本海を北上し、内陸へ向かうルートの存在も考えられています。

県の北部に残っている飛鳥・奈良時代の小金銅仏は、この地域に早い時期に仏教が伝播し、定着したことを物語る資料です。

第37回特別展
「大昔のけものたち －信州のほ乳類化石－」

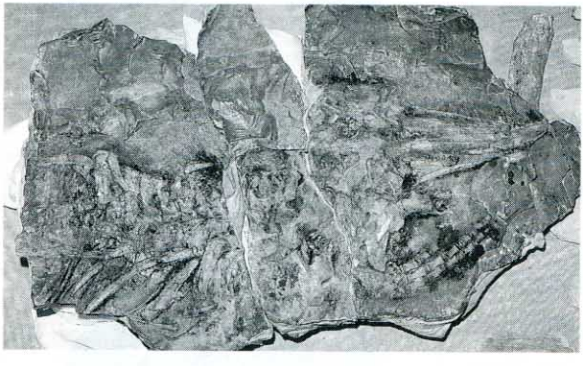
平成8年7月27日(土)～8月25日(日)

博物館では、この夏に特別展**「大昔のけものたち－信州のほ乳類化石－」**を開催します。

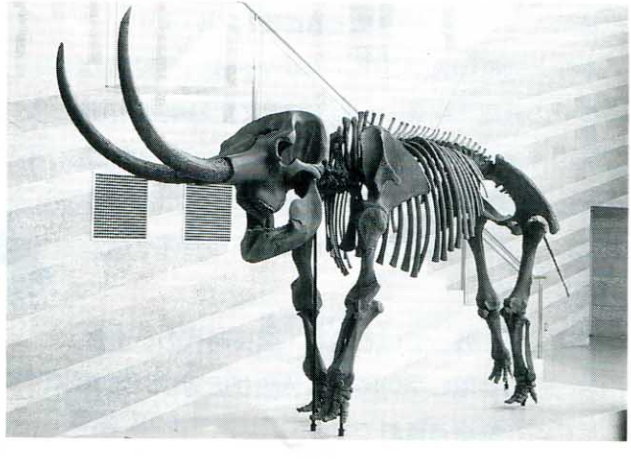
長野県内からは、さまざまなほ乳類の化石がみつかっています。これらの動物は、各時代ごとにそのころの環境に適応しながら生息していたものです。長野県の大地は長い地質時代を通じて大きな環境の変化を何度も経験してきましたが、すんでいる動物たちもこれに応じて時代ごとに変化してきました。

さまざまな化石を通して、信州の大地がたどってきた悠久の歴史と、今では見ることのできない大昔の動物たちの姿にふれていただきたいと思います。(畠山幸司)

▲アロデスムス(シナノトド)の頭骨
アシカやアザラシの仲間のあごの化石です。長野県宝。(四賀村化石館提供)



◀シナノイルカの骨格
頭部や前肢(ぜんし)などの体の主要部が保存された貴重な化石です。長野県天然記念物。(上田市高仙寺提供)



アケボノゾウの復元骨格……▶
体高約2mの小型のゾウだったと考えられています。県内では、東部町や北御牧村などから化石がみつかっています。
(神戸市埋蔵文化財センター提供)

** 博物館と友の会について考える **

1、博物館と利用者

当館は、開設して15年目になります。川中島古戦場という立地環境からして、観光客が多いとみられがちです。しかし、アンケート調査によると、入館者の60～70%が地元の方となっており、一過性の利用が中心になる観光地型の博物館というよりは、地域住民により支えられている博物館ととらえることができます。

▲「星を見る会」友の会会員の案内で星座を探す

しかしながら、実際には地域住民に身近な存在として親しみをもって、博物館が利用されているとはいえない状況です。日常的な利用を期待するには、暮らしの中にとけ込んでいるような地域ミュージアムを指向し、いつでも気軽に足を運んでもらえるような、市民と共にある博物館を目ざしたいと思います。

2、友の会とは？

現在、人口10万人あたりの割合では、長野県は日本一多くの博物館を有するところとなっています。週休２日制の普及、長寿化の進展、価値観の多様化など私達をとりまく社会情況も変化する中で、博物館利用者のすそ野も広がり、「いつでも、どこでも、だれでも」学習できる生涯学習社会の実現が望まれている今、博物館への期待もいっそう大きくなっています。かつての“ものを見せてやる”といった一方的な姿勢から、利用者のためにある“開かれた博物館”へと、その役割も大きく変わることが求められています。

このような今日的社会情況において、博物館と利用者を結ぶ接点となる存在が友の会組織です。博物館利用者の集合である友の会を核にして、地域社会との結びつきを深め、やがては多くの人によって“わたしたちの博物館”と呼ばれるようになった時、“地域に根ざした博物館”としてその役割を果たすことができます。

博物館利用者が博物館の活動に参画する機会のひとつが友の会であるとするならば、博物館と地域社会の日常的なつながりの窓口は、まず開かれたと言えます。利用者が受身ではなく、能動的に博物館活動にかかわることで、博物館活動はますます活性化してくることと思います。まさに、市民が博物館を支え育てるという図式になってくるはずです。

例えば博物館には、調査研究・収集・保管・展示・教育普及・管理など多様な機能がありますが、これからは博物館学芸員だけの占有物ではないはずです。博物館活動に参画する意志を持つ人々が、それぞれの機能に参加できる体制を整えるのも博物館側の務めといえます。

こうした博物館利用者の積極的、自主的な博物館活動の窓口こそ友の会といえます。友の会会員相互の連帯感、博物館に対する親近感を核として、地域社会とのコミュニケーションの輪をいっそう広げることができるようになれば、博物館活動の成果を広く地域社会に還元することができ、

地域と博物館とのつながりもいよいよ密接なものとなるはずです。

3、友の会の飛躍に向けて

平成５年６月１日に、友の会が発足して、現在４年目になります。見学旅行・講演会・観察会・講習会・まつり・同好会活動など種々の事業を企画実施してきました。現在約300件(約800人)ほどの会員が集い、同好会も４つできています。実際には、博物館側からの働きかけによる活動が中心になっていますが、３年が経過したいま、会員の多様な欲求に応え、会員自身による企画運営をすることで、更に充実した博物館活動への参加が可能となるのではないでしょうか。

会員個々の楽しさ・充実感、会員相互及び地域社会の連帯感という連鎖を友の会を核として実現していきたいと考えます。

市民がいつでも何回でも足を運びたくなる魅力ある博物館像を描きながら、友の会の意義と活動のあり方について、改めて考えてみたいと思っています。　（山口　明）

表紙の仏像の解説

◀菩薩半跏像（銅造）
像高 30.0cm

頂上に日月の意匠を表した大ぶりな宝冠を頂き、両肩には百済仏に多く見られる意匠化した垂髪が表されています。中央で左右に分けた額際の髪の表現、刻線で表された眉や、鋭く切れ上がった目、際立った細身の体、右膝下に強い曲線を示す衣文など、渡来系金銅仏の特色を伺わせています。火災にあい右手のひじから先を失い、木製の後補に変わっています。本体、台座共一鋳で、台座から胴体半ばまでを中空にしています。

県内にはこの他、長野市旧山千寺本尊・銅造観音菩薩立像（７世紀後半）、波田町盛泉寺の銅造菩薩半跏像（８世紀後半）が、古代小金銅仏の遺品として残っています。県の北部に多く残るこれら小金銅仏からは、観松院の仏像に見られるようなアジア大陸からの仏教伝播のルート、県内への仏教の広まり方、渡来仏を手本とする日本の仏像への影響などを想定することができます。

当館ではこれらのうち、白凰期小金銅仏の優品といわれる旧山千寺の銅造観音菩薩立像（重要文化財）を９月下旬から展示公開します。　（降幡浩樹）

博物館だより No.36　1996.6.15
編集・発行　長野市立博物館
〒381-22 長野市小島田町１４１４
☎ (026)284-9011